

父島洲崎の変遷について（その2）

—洲崎飛行場と太平洋戦争—

上 條 明 弘（父島在住）

要 約

父島洲崎は自然豊かな海岸であったが、日本海軍により埋め立てられ、洲崎飛行場が建設された。小さな飛行場であり、陸上機があまり配備されていなかったため、最初アメリカ軍は重視していなかった。しかし、硫黄島攻防戦では、特別攻撃などの支援作戦の中継基地となり、重要な役割を演じた。そのため、アメリカ軍は、洲崎飛行場に対し、艦上機、陸軍機により集中的な攻撃を与えた。

I. はじめに

前稿（上條、2009）では、父島洲崎という土地にまつわる歴史について大正時代までを見てきた。延宝幕府巡検隊の来航、小笠原への欧米人の到来、欧米系島民の定住、幕府による小笠原回収と撤退、明治政府による再回収、ペリーの見た大洞窟、幻の映画「極楽島の女王」などの内容であった。

今回は、日本海軍の洲崎飛行場建設、太平洋戦争における洲崎飛行場の果たした役割について考えていきたい。

II. 洲崎飛行場建設

天野（1998）は、洲崎の海岸について、以下のように述べている。天野の弟の天野厚生への聞き取りでも同様の情報を得た（2009.10.30.聞き取り）。

「今はなき洲崎の海岸 父島には美しい白い砂浜の海岸が幾つかあった。この白い砂浜は、島の風景を語るとき、どうしても欠かすことのできない素晴らしい存在であった。姿、形に加え、その美しい景色を代表したのが、今はなき「洲崎の海岸」であったと思う。昔の洲崎を知っていて、私と共に賛美してくれる人は少なくなった。」この機会に図面（図1）をもって紹介したい。

洲崎には、当時蔬菜の新品種とその改良に取り組む農事試験場があり、試験場の回りはタマナ・モモタマナ・海岸イチビなど、人木の防風林が取り囲んでいた。この防風林を背に展開する

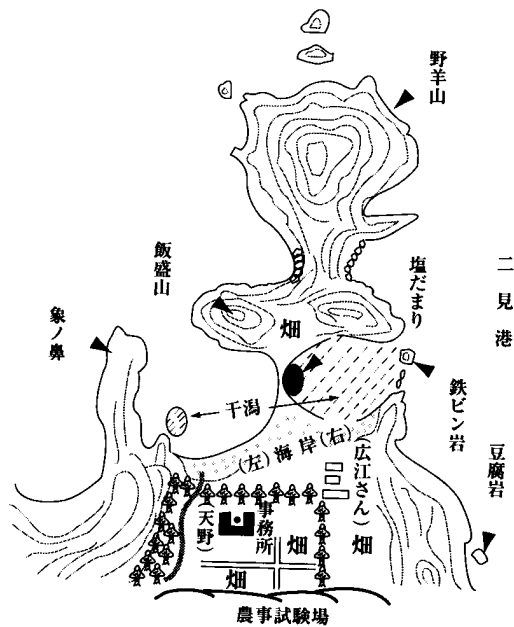


図1 飛行場建設以前の洲崎（天野、1998）

のが洲崎の海岸であった。

図面の通り、野羊山を正面に据えた砂浜は富士山のような形をして伸び、野羊山からは逆さ富士のように伸びて接していた。この砂浜の「象ノ鼻」側の海は深くて青く、二見港側の海は浅くて干潮時には干潟となってさまざまな岩はだを現にしていた。このコントラストはまさに天然の美であり、絵のような風景を切り崩して、海軍の飛行場建設がはじまったのである。かくして洲崎の海岸は消滅してしまった。」

図2に1895年北沢正誠島司が撮影した洲崎の北側（二見湾側）に広がる干潟の写真を示す。左に野羊山（当時は野羊島）、右側の鉄瓶岩の後ろには三日月山が遠望できる。

1932年、東京府農事試験場用地造成工事という名目で海軍飛行場工事が開始された（小笠原村教育委員会、2002）。「小笠原父島埋立工事平面図」（日本海軍、発行年不明）には、その工事の概要が記されている。「増補版寫真帳小笠原」（倉田、1993）には、地鎮祭とその後の祝賀会の写真、当時歌われた洲崎音頭の歌詞が掲載されている。1937年に500メートル滑走路が完成、東京府第1農場の名目で海軍の不時着陸場となった（小笠原村教育委員会、2002）。

工事の様子を天野（1995）は以下のように記述している。



図2 洲崎の干潟（明治28年北沢正識島司が撮影した写真）（田畑、1993）

「その洲崎に大きな変化を迎えることになったのは、私が、小学校入学前後だと思う。大量のダイナマイトをもって、象の鼻、飯盛山を切り崩して、海軍の飛行場建設が始まったのである。

恐い思いは覚えている。2～3述べてみると、皆んなで発破をみていたら、以前不発だった隣のダイナマイトに引火して、同時に爆発したため、岩石が空中高く舞い上がり、私連に向かって飛んできた。私達は夢中で近くのトロッコの下にもぐり込んで、一人の怪我人もなくホッとしたことがあった。これ以後、発破のときは、扇浦に通じる道の奥まで避難することになった。また、ある時は、父の体調が悪く、座敷に布団を敷いたまま避難し、帰ってきてみたら屋根を突き破って、40cmの楕円形の格好いい、堅い石が布団の上に落下していた。記念にとってあったが、昭和19年6月15日の大空襲で大村で焼壊してしまった。更には、この飛行場の建設には、2つの組が仕事をしていたが、一方の組は、喧嘩が絶えることなく、ビールビン等が飛んで怖い思いもした。この時期に洲崎にも駐在所が設けられたと思う。

このような背景もある中で完成した飛行場は、というと確かに海軍の戦闘機の訓練は23回あった。しかし、子供の頃の私達にとっては、お正月の絶好の凧上げの場所としての印象の方が、強く残っている。」

この飛行場へ最初に降り立った飛行機を父島出身の沖山鐵雄が操縦していた（沖山の娘、門出京子への聞き取り、2008.10.25）。沖山は当時海軍の館山航空隊に所属していた（その

後、彼は真珠湾攻撃に「翔鶴」第二次攻撃隊として参加した)。また、瀬瀬堀五郎平への聞き取り(2008.10.11)によると、以下の通りである。

「洲崎は、以前は干潟で、潮が満ちると腰ぐらいまで水が来た。潮が引くと干上がってしまう。当時、象鼻崎はとても高かった。北側(二見湾側)には土瓶岩もあった。軍の工事により、埋め立てられ、飛行場となった。しかし、日本軍の飛行機が飛んでいるのはほとんど見なかった。試験飛行(沖山鐵雄が搭乗した飛行機の事か?)の時、赤土が舞い上がり、扇浦の方が見えなくなってしまった。そのような状態だったので、飛行場はあまり使われなかったのではないか。」

洲崎飛行場について、山田(1987)は次のように述べている。「滑走路は航空母艦ほどあろうか実に短い。着陸には大変至難な飛行場である。低い爆音がする。一機の友軍機だ。着陸が遠すぎる。中ほどに着陸した友軍機は止まりきれず、太平洋の海中にざぶんと飛込む。次は翌々日、また一機旋回して着陸姿勢に入る。ああ早すぎる。硫黄島作戦中友軍機が4、5回来たが、無事着陸できたのは一機ぐらいか」。また、中道(1983)は「洲崎の飛行場跡(平時は第一農場と言っていた) 当時は滑走路700mと言われ、誠に小さい飛行場で、着地に度々事故をおこした。」と述べている。難工事の末完成した飛行場であったが、滑走路の長さなどのために運用が難しかったようである(1945年の硫黄島の戦いの際の洲崎飛行場については後述する)。

では、いつ洲崎飛行場に飛行機が配備されたかを見てみよう。中山・林(1999)によると父島航空隊に配備された航空機は以下の通りである。

昭和17(1942)年8月1日 海軍航空部隊(三座水偵6機)

昭和18(1943)年7月1日 海軍航空部隊(三座水偵8機)

同年10月1日 海軍航空部隊(三座水偵8機、艦攻8機)

昭和19(1944)年3月 父島航空部隊父島基地(三座水偵8機、艦攻8機)

同年4月 海軍航空部隊(三座水偵16機、艦攻8機)

同年6月 佐世保航空隊(父島派遣隊)、小松崎航空隊(父島派遣隊)

昭和19(1944)年8月 父島航空隊(三座水偵16機、19.12.5解隊)

父島航空隊の整備兵だった滝沢幸夫が「父島の基地にはゼロ水艇が6機ありました」(滝沢、1987)と証言していることから、「三座水偵」は零式三座水上偵察機を指していることがわかった。「艦攻」は九七式艦上攻撃機と考えられる。九七艦攻の後継機、「天山」艦

上攻撃機の初陣は1943年11月のブーゲンビル沖航空戦で（秋本、1981）、広く陸上にまで配備されるようになったのは昭和19年らしい。また、「佐世保航空隊（父島派遣隊）」は二式水上戦闘機（零式艦上戦闘機を水上機に改造したもの）10機（竹井、1992；渡辺、1992）、「小松崎航空隊（父島派遣隊）」は小松島海軍航空隊（高松）より派遣された九四式三座水上偵察機10機（竹井、1992）のことである。つまり、父島に配備された海軍機は水上機が主で、洲崎飛行場に飛行機（九七艦攻）が配備されたのは1943年10月からということになる。なお、九七艦攻は3人乗りなので、要人の輸送などにも利用されたと考えられる（なお、1945年洲崎飛行場を利用した天山艦上攻撃機による攻撃については後述する）。

なお、海軍の水上機基地は現在海上自衛隊父島基地分遣隊の場所にあった。瀬堀五郎平への聞き取りによると、現在の共勝丸が停泊する岸壁付近にもスロープ（水面に降りた水上機を引き上げる斜面）があり、格納庫の建物が付近にあったとのことである。筆者が初めて小笠原を訪れた1991年には、そのスロープが島民のボート置き場として活用されていたが、岸壁の拡張工事でなくなった。

Ⅲ. 1944年6、7月の父島への空襲と洲崎飛行場

1944年6月15日、父島はアメリカ軍機動部隊の爆撃を受けた。防衛庁防衛研修所（1968）の編纂した「戦史叢書・マリアナ沖海戦」には以下のように記されている。

「六月一五日 この日硫黄島においては早朝から敵の電話を近くに傍受し警戒していたが、午前中は天候不良のため空襲はなかった。しかし一四〇〇から一五四五の間硫黄島に約六〇機、父島に八〇機、母島に五〇機、聳島に二〇機が来襲し、硫黄島では零戦三七機をもって遊撃、地上砲火により一三機、空戦により四機を撃墜したが、二八機が未帰還となり翌日の可動機はわずか三機に過ぎなかった。更に所在の九〇一空陸攻三機炎上、四機被弾の被害を受けている。父島及び母島では八機（内 不確実二機）を撃墜したが、サイパンから避退中の水偵等二機炎上の被害を受けた」

この空襲を行ったのは、B29の基地をサイパン島に作るため、マリアナ諸島攻略に来襲したアメリカ第5艦隊（提督 Spruance スプールアンス大将）のうち任務58.1機動部隊（TF58.1:司令官クラーク J.J.Clark 少将、空母ホーネット Hornet、ヨークタウン Yorktown、ベロー・ウッド Belleau Wood、バターン Bataan 他）と任務58.4機動部隊（TF58.4:司令官ハリル W.K.Harrill 少将、空母エセックス Essex、ラングレイ Langley、カウペンス Cowpens 他）である（Morison, 1953）。6月13日に日本軍機動部隊が泊地のタウイタウイ

(フィリピン)を出発したことを潜水艦から知らされたスプールアンズ大將は、クラーク少將に1日で攻撃を切り上げ、17日までに決戦海域に戻るように命令した(18日に日本艦隊と決戦になると判断したため)。最大の攻撃目標は硫黄島の飛行場で、日本本土から硫黄島を経由してマリアナを攻撃されることを阻止するためであった。ところが、クラーク少將は攻撃が1日しかできないのは不十分と判断し、58.1部隊を高速(25ノット)で運航させ、15日にも小笠原を攻撃することにした。(58.1と58.4の艦艇は30ノット以上の速度が出せたので、15日、16日の二日間の攻撃が可能となった(「第二次大戦のアメリカ軍艦」(小坂ほか、1984)のデータより考察))。

15日、スコールが降り、南西より風力6の強風が吹く中、14:30硫黄島への攻撃隊を発進させ、30分後父島と母島への攻撃隊を発進させた(Morison, 1953)。硫黄島では20機の零戦(ゼロ戦:零式艦上戦闘機)を撃墜し、地上にあった7機の飛行機を破壊した。父島では飛び上がる飛行機はなかったが、対空砲火により1機が撃墜された。3隻の小さな輸送船が炎上し、21機の水上演習機が破壊された。

16日は強いスコールが降り、台風模様であったので、朝の父島の攻撃は取りやめ、午後から硫黄島の攻撃だけとなった。この戦闘でアメリカ軍が失った航空機は硫黄島で2機、父島で2機であった。

さて、この攻撃は、日本本土とマリアナの連絡を絶つことが目的であったので、父島では洲崎飛行場が最大の攻撃目標だと普通は考えられる。しかし、日本海軍の戦闘記録である「父島方面特別根拠地隊 戦時日誌・戦闘詳細」(日本海軍父島方面特別根拠地隊司令部、1944a)によると、「洲崎飛行場(原文のまま)被弾2」とある。現在海上自衛隊父島基地分遣隊の位置にあった水上機の基地では「父空格納庫1焼失、水偵13機、26航戦零水6機、紫雲2機炎上(港内波浪大にして飛行できず)」とある。「水偵」は零式三座水上偵察機か九四式三座水上偵察機、「零水」は零式小型水上偵察機、「紫雲」も水上偵察機である。このように水上機基地は大被害を受けているのだが、洲崎飛行場は軽微な損害しか出していない。

また、7月4日(アメリカの独立記念日)にもクラーク少將は硫黄島と父島・母島を攻撃している(Morison, 1953)。その時の日本海軍父島方面特別根拠地隊司令部(1944a)の戦闘記録にも「洲崎飛行場 被弾2」とだけある。6月15日と同じ内容なので、被害があまりなかったように偽って報告している疑いもある。しかし、艦船の多くが撃沈・大破し、水上機基地の特根司令庁舎と機雷庫が破損していることを考えれば、アメリカ軍の攻撃目標は洲崎飛行場よりも艦船や水上機基地であったと判断できる。その時、洲崎飛行場には飛行機があまり配備されていなかった(最大でも1943年10月から配備された艦攻8機)か

ら攻撃目標として重視されていなかったのだろう。

Ⅳ. アメリカ海軍の艦砲射撃と洲崎飛行場

アメリカ海軍艦隊司令部による戦闘記録（United States Fleet Headquarters of Commander in Chief, 1944）によると、1944年8月4日から5日、アメリカ海軍任務58機動部隊は小笠原（硫黄島、父島、母島）を攻撃した。その時の洲崎飛行場の状況について報告されているので、取り上げる。

その前に、この攻撃の概略を述べる。攻撃目標の第一は船舶で、対空砲、軍事施設、一般地域も攻撃目標とされた。サイパンで給油後、8月2日に出航した。高速空母部隊のTF58.1とTF58.3はマリアナ諸島を東に進んだ後、北進して小笠原に向かった。司令官はまたもヤクラーク少将である。8月4日の9時に戦闘機が硫黄島、父島、母島に機銃掃射を浴びせるために離陸し、12時から攻撃が開始された。攻撃の前、8時3分に、父島から日本の輸送船団が出航するのが発見され、昼には嫁島付近に到達すると予想された。そこで、船団を攻撃するために、巡洋艦部隊13（CruDiv13）を直ちに派遣することとした。TF58.1の駆逐艦部隊91（DesDiv91）と機動部隊58.3の駆逐艦部隊100（DesDiv100）も合流し、任務部隊58.1.6（TF58.1.6）が結成された。TF58.1.6の編成は以下の通りである（軽巡洋艦4隻、駆逐艦7隻）。

CruDiv13 旗艦軽巡洋艦オークランド（Oakland）司令官デュボース少将（T. DuBose）軽巡洋艦サンタ・フェ（Santa Fe）、モービル（Mobile）、ビロキシー（Biloxi）、駆逐艦ブラウン（Brown）

DesDiv91 駆逐艦イザード（Izard）、チャレット（Charrette）、バーンズ（Burns）

DesDiv100: 駆逐艦コグスウェル（Cogswell）、ナップ（Knapp）、インガソル（Ingersoll）

TF58.1.6の輸送船団攻撃行動は詳細に記されているが、ここでは省略する。このことについては、別稿で取り上げたいと考えている。木俣（1986、1994）と多田（1980）によれば、四八〇八船団（駆逐艦「松」「旗風」、海防艦4号と12号、駆潜艇51号の5隻の護衛艦と、5隻の貨物船「昌広丸」「利根川丸」「延寿丸」「第七雲海丸」「竜江丸」と他2隻は、艦載機と艦砲、サイパンから来た陸上爆撃機B-24リベレーターLiberator（注：夜明会（1983）によると、同日2300父島で撃墜した米海軍機リベレーターの生き残った乗務員1名はクエゼリンから来たと言ったというのが、3000km以上離れたクエゼリンから航続距離3,380km（牧、1995）では到達できないだろう。Hearn（2003）が述べるようにサイパンのアスリート（アイズレー）飛行場から来た機体だろう。当時陸軍用に開発されたりベ

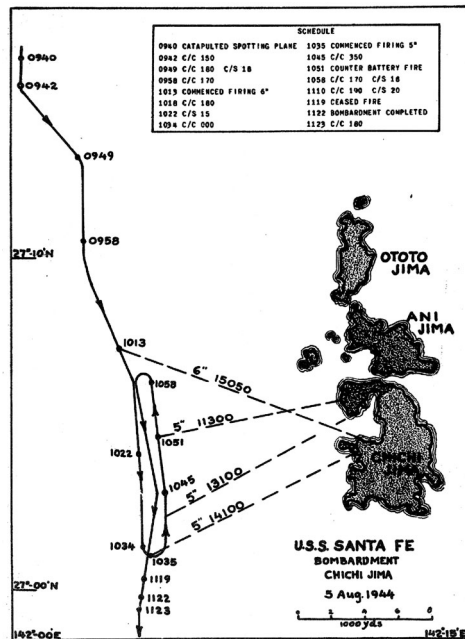


図3 巡洋艦サンタ・フェの父島への艦砲射撃時の航跡
(United States Fleet Headquarters of Commander in Chief, 1944)

レーターを海軍も使用していた)の攻撃により、「旗風」、海防艦4号と12号、駆潜艇51号以外は沈没した。

輸送船団を壊滅させた後、TF58.1.6は父島と兄島の砲撃に向かった(図3)。8月5日9時40分、水上偵察機が射出され、父島上空に向かった。10時13分、二見港の船舶に向け砲撃を開始した。視界が悪かったので、偵察機からの情報で目標をとらえた。反転して北上し10時41分から51分まで水上機基地(現在の海上自衛隊基地)を攻撃した。その後反転し南下し、11時09分、再び水上機基地を攻撃した。11時22分、砲撃を終了し、南下した。

戦闘記録では、陸上の目標として16か所を挙げ、地図で示している(図4、数字が図と重なってしまい判読しづらい)。そのうち、もっとも詳細に記述しているのが水上機基地である。「西半分には丘があり砲撃できないが、東半分は砲撃を免れようとカモフラージュされている。8~10機の飛行機がエプロン上二列に並べられていたが、砲撃により破壊された。建物の東側はカモフラージュされている。ここからは対空砲火や地上からの砲撃はなかった。以前偵察した時に確認された連装の機銃もみられなかった。たぶん破壊されたか隠されたのであろう。」

それに対して、洲崎飛行場の記述は少ない。「二機の単エンジンの飛行機が崖の近くの西側にあった。たくさんの対空砲が両側の崖にある。」この記述の少なさから考え、アメ

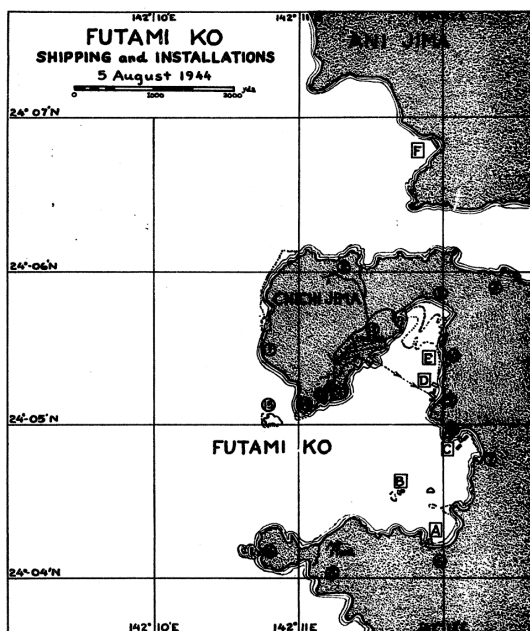


図4 攻撃目標となった二見港の船舶と軍事施設
(United States Fleet Headquarters of Commander in Chief、1944)

リカ軍が洲崎の飛行場をあまり重視していなかったことが考えられる。

このとき確認された単エンジンの飛行機は、前述した父島航空隊へ1943年10月に配備された艦攻8機の一部かもしれない。しかし、後述する父島航空隊の報告では、洲崎飛行場での航空機の被害が報告されておらず、攻撃後の使用可能機が零と報告しているので、この飛行機は以前の攻撃などで破壊された使用不能の機体なのかもしれない。

日本側の戦闘記録を見てみよう。「父島方面特別根拠地隊戦闘詳報 第四號」（日本海軍父島方面特別根拠地隊司令部、1944b）には8月4日から5日にかけてのアメリカ軍機動部隊に対する戦闘に関する経過、発した電文、戦果、被害などが記録されている。

戦闘の経過については以下の通りである。時差によるものと思われる時刻のずれはあるが、アメリカ軍の戦闘記録とほぼ同様である（時刻を4桁の数字で示してある。漢数字をアラビア数字に、旧字体は新字体で表記した）。

0545 敵艦上機100機以上来襲す。直ちに対空戦闘

0910 310度水上艦艇11隻見ゆ。観測機を飛翔せしめたり。

0955 巡洋艦4隻、駆逐艦7隻、西方8000mに近接。0905艦砲射撃を開始す

1011 0010哨戒機の侵襲以来黎明迄常時2機ないし3機上空飛翔。0600より0620まで戦爆連合80

機以上来襲。黎明以後撃墜確実2不確実1損害軽微

1345 0905より1025迄巡洋艦4、駆逐艦7、艦砲射撃を受く。1050敵艦南方へ去る。

8月5日の1605に父島特別根拠地隊司令官から横須賀鎮守府長官に宛てた電文には以下のようにしるされていた。

戦闘概況 其の五

1、本日の綜合状況左の通り

0010大型機の侵襲に始まり天明以後1330頃迄戦爆連合12回400機以上来襲。熾烈なる銃爆撃を加え一部焼夷弾及び魚雷（三機）を使用せり。

0907より1020迄巡洋艦4隻駆逐艦7隻、父島西方海面10km付近に近接、縦陳列を以て猛砲撃を実施し南方に航過せり。砲撃目標は砲台、建物、軍需品隧道入り口等にありたるものの如し。

2、戦果

撃墜10機（内不確実2機）以上詳細調査中。不時着機多数あるものの如く、東西に浮上潜水艦及搜索機あり。

3、被害

（イ）彌生丸大破使用に耐えず、濱江丸火災、慶南丸南陽丸小火災、第二号輸送艦沈没
電話線全、送信所管制線切断し各部連絡不能にして詳細目下調査中

飛行場砲撃により被害若干あり

軍需品被害軽微

（台風被害により第一号輸送船を含め輸送艦全部沈没す又は使用不能）

（ロ）慶南丸艇長戦死外艦艇に死傷多数あり、当隊収容傷者112名。

4、8cm高角砲残弾260発（6門分）2000発急送を要す。

同じく、6日付けの電文には「洲崎飛行場使用可能。4,5両日の空襲により当地可動対潜航空兵力なし」と記されている。

また、父島航空隊から横須賀鎮守府長官に宛てた電文には以下のようにしるされていた。

戦闘概況（8月4日～5日）

1、戦果 父特別根拠地隊既報の通り

2、飛行機現状

（イ）水偵（水上偵察機）4機、水戦（二式水上戦闘機）5機使用不能

（ロ）水偵2機修理の上使用可能の見込み、明日の使用可能機数 零

3, 戦死1名、重傷1名

4, その他被害軽微なり

洲崎飛行場については、「砲撃により若干被害あり」とあるだけで、飛行機の損害については報告されておらず、次の日には飛行場が「使用可能」と報告されているため、今回の攻撃でも、洲崎飛行場は主な攻撃目標ではなかったと判断できる。

それに対して、水上機基地では使用可能機がなくなるほどの損害を受けており、船舶もすべて航行不能になっている。やはりこの時期のアメリカ軍の主要な攻撃目標は船舶と水上機基地であったことが、日本軍の戦闘記録からも裏付けられた。

アメリカ海軍の軍艦が用いた艦砲は以下の通りである。（中川、2001；小池、1984）

47口径6インチ（15.2cm）Mk16三連装砲：クリーブランド級軽巡洋艦のサンタ・フェ、モービル、ビロキシー）

38口径5インチ（12.7cm）Mk12（砲撃と対空の両用砲：オークランド級のオークランドの主砲（連装）、クリーブランド級軽巡洋艦の対空砲（連装）、フリッチャー級駆逐艦（7隻の駆逐艦すべて）の主砲（単装）

47口径6インチ砲の最大射程距離は23,182mで発射速度毎分7～10発（国本、2001）、38口径5インチ砲の最大射程距離は16,200mで発射速度毎分15～22発（梅野、2007）である。最大23kmの距離から目標を狙えるはずなのに、艦隊は近づいた所から砲撃をしている。日本軍は、艦隊が8 km西方（10kmとも記載している）に近接したと記録している。アメリカ軍戦闘記録で図示された巡洋艦サンタ・フェの航路で見ると、湾口から10.5kmまで近づいている。1013に約16.5km先の目標（扇浦）に砲撃を開始しているが、このとき使用しているのは最大射程23kmの6インチ砲である。1035に15.4km先の目標（洲崎）に対して5インチ砲の砲撃を開始した。1051には12.3km先の目標（三日月山）に5インチ砲で砲撃した。

当時父島に配備されていた海軍の四五口径十年式十二糎高角砲（4.7インチ）の最大射程は15,600m（発射速度は毎分12発）で、この射程の中に約1時間にわたり艦隊はいたことになる。確かに艦隊は危険にさらされていたが、アメリカ側の記録には被害はなかった。各艦からの報告を引用する（United States Fleet Headquarters of Commander in Chief、

1944)。

「モービルの報告：敵の海岸砲台の少なくとも5インチの連装砲台である（注：当時父島に4.7インチの単装砲があったが、連装砲は配備されていない）。水煙の大きさや偵察機からの観察から判断できる。射撃はとても正確で、モービルの近くに数回水煙が上がり、3回船の上を砲弾が飛び越えた。1回は港側の後ろに近接弾が落ち、船を激しく揺らした。」

「ビロキシーの報告：海岸への砲撃の最中、数千ヤード以内に多くの水煙が見られた。砲撃の終わりの頃には、水煙は1100ヤード以内に近づき、敵の海岸砲台の砲撃が正確になってきた。モービルの上を何回か砲弾が飛び越えたり、ビロキシーの500ヤード以内に水煙が上がったりすることもあった。敵の砲台は4.7（12cm）の砲を持っていると思われる。」

「三日月山の陸軍二四糎榴弾砲の1発が巡洋艦に命中し、巡洋艦が戦列を離脱した」という記録（吉岡、1985）があるが、ビロキシーへの近接弾のことを指しているのかもしれない。当時父島に配備されていたのは四五式二四糎榴弾砲で、最大射程10,350m（佐山、2008）であったので、高度のある三日月山からは艦隊を射撃できる能力があったのだろう。

艦隊にはレーダーと偵察機という二つの目があったため、天候が悪く視界が効かない中での攻撃が成功したと見られる。

「ビロキシーの報告：5インチ砲の砲撃が始まる前に飛行を開始しなかったため、敵の飛行機は自らの陣地近くでの攻撃のチャンスを逃してしまった。彼らは彼ら自身の手で、目標に命中させることを不可能にしてしまった（注：偵察機があれば日本軍の砲撃はより正確に行えたことを指している）。」

「モービルの報告：偵察機と共に行った副砲（5インチ砲）の（我々に砲撃を行った）敵海岸砲台への攻撃はおおむね効果的であった。海岸砲台に向けて砲撃が始まると、砲台は最終的に沈黙した。モービルの偵察機は、砲台が破壊されたことを確認した。砲撃開始後しばらくして、海岸砲台付近で大きな爆発が船からも観察された。主砲の攻撃は装甲を貫通するためのものなので、主砲による攻撃は効果的とは思えない。」

つまり、日本軍が砲撃してくれば、その砲台を目標に攻撃を集中することにより破壊

することができたのである（陸軍の高射砲部隊に所属していた徳井一男の証言（徳井、1987）によると、敵艦に砲撃すると砲台に攻撃を集中してくるので、砲撃が中止されたという）。そのために、発射間隔の短い5インチ砲の攻撃が有効だったと考えられる。6インチ砲は射程距離も長く、威力は大きかったが、砲台を攻撃するにはオーバースペックであった。そのため、危険を承知しながら、艦隊を目標に近づけ、5インチ砲での攻撃を中心に行ったのであろう。この艦隊の6インチ砲の総数は36門、5インチ砲は82門もあった。日本軍の一二糎高射砲や二四糎榴弾砲の射程圏内に入ろうが、この圧倒的な火力をもってすれば十分対応できると考えたのであろう。

当時、小笠原に配備されていた日本軍の砲台はむき出しの状態、遮蔽されていなかった（以後、砲は壕の中に入れられた）。そのため、至近弾による巻き上がった土砂などにより砲撃ができなくなることもあった。この艦砲射撃以後、攻撃されても打ち返さないような命令が下された。敵が上陸してくるのに備えて兵力を温存するためであった（父島の陸軍通信隊長だった吉岡健児への聞き取り、2010.1.5）。

陸軍第一〇九高射砲隊（夜明山）の土屋大の証言によると（夜明会、1983）、「二機の複葉の観測機（注：偵察機と同じ）が父島上空（射程外）を飛び、艦砲の着弾を指示、その度に弾着が変わり、砂煙が上がる。地上からの砲火がなかったので、観測機が近寄り、定位につけ、その砲撃（注：夜明山に4門配備されていた八八式七糎高射砲か？）によりたちまち一機撃墜、炎を吹いた陣地を発見され、艦砲の砲弾が陣地近くに落下したが、たいした被害はなかった。」と述べている（アメリカ軍の記録には、偵察機の撃墜の記録はない）。このように偵察機による指示が日本軍の砲台への正確な砲撃を可能にしたのである。日本軍の航空戦力（特に戦闘機）が無力化されたことにより、このような攻撃が可能であった（注：土屋は偵察機が複葉機と記しているが、当時アメリカの軽巡洋艦に装備されていたのは、単葉のSO3CシーミュールSeamewかOS2U キングフィッシャーKingfisherである（中川、2001））。

2008年10月7日、洲崎南側の象鼻崎と焼場海岸の間の海中で5インチ艦砲の不発弾が処理された（小笠原村総務課より聞き取り）。この砲弾は8月5日10時35分から開始された砲撃のものかもしれない。吉岡によると、アメリカ艦砲の不発弾はかなり多く、砲撃の後あちこちにごろごろ転がっていたので、砲弾の性能が悪かったという。

V. 振分山格納庫

この格納庫は洲崎の東側、二見湾に面した「松海岸」の東端の突き当たりであり、振分山の麓にあたる。当時海軍209設営隊に所属していた中道（1983）によると

「父島に対しても爆撃は益々激烈を極めた。当時サイパンをたたき、本土から飛来する特攻機の中継基地として洲崎の飛行場が使用されたと聞くが着地まもなく米軍機のえじきとなる事が多く、我が209設営隊と303設営隊が昼夜兼行で、振分山の下に、戦闘機三機ずつ格納する大格納庫を三箇所並べて掘ったのであるが、戦局は我に不利となり、本土よりは特攻機も飛来せず、米軍の上陸に備えて、固く入口を閉ざし、銃眼のみが二見港をにらんでいたのであった。」

とある。硫黄島の戦いの時に特別攻撃を行った第二御盾特別攻撃隊で、攻撃後父島に降り立った零式艦上戦闘機と彗星艦上攻撃機がこの格納庫に収められている（後述）。

なぜ、洲崎飛行場と離れている振分山の麓に飛行機格納の壕を掘ったのだろうか？おそらく、飯盛山は柱状節理による割れ目が全山を覆っており、崩れてしまうので、壕を掘れなかったのだろう。なお、飯盛山の地質は、丸縁湾層のデイサイト溶岩ドームでできている（海野、2007）。そのため、溶岩ドームが上昇して冷えた時に、冷却方向と垂直に柱状節理の割れ目が入ったため、溶岩の中心に向かって放射状に割れ目が入っている（海野・中野、2007）。

Ⅵ. 硫黄島作戦と洲崎飛行場

ここでは、硫黄島作戦で洲崎飛行場が果たした役割について述べたい。硫黄島の飛行場は滑走路が長く、複数の飛行場があり、条件が優れていた。洲崎の飛行場はそれらに比べれば使用されていなかったようだ。

山下茂幸は、天山艦上攻撃機のパイロットとして、1944年10月20日に一式陸上攻撃機に搭乗し、攻撃二五六飛行隊の硫黄島派遣隊長として硫黄島に着任した。以下、洲崎飛行場に関する部分を引用する（山下、1995）。

「二十七航戦や陸軍の参謀が要務のため父島に赴かれる場合には、天山の最後部座席に電信員と同席していただき飛行した。二見湾の狭い海岸を埋め立てて急造された飛行場では、風向・風速により、山側からの着陸の場合には、木をなめるような飛行経路となり、山側へ向かって離陸する時には、島肌を舐めるように旋回飛行を行い、低空で二見湾上を通過してから、上昇飛行に移る必要があった。海側から着陸する時は、問題点は少なかったが、海側へ離陸する時には、離陸直後に車輪収納が終わっても、十分加速されたことを確認しなければ、上昇飛行には移れなかった。」

このように、硫黄島と父島を幹部が移動する場合、洲崎飛行場が使われた（1944年7月

1日に堀江芳孝陸軍父島派遣司令部参謀は若い海軍大尉が操縦する飛行機に搭乗し硫黄島から父島に向かったが、故障で飛行機の脚がでなかったため爆弾を載せたまま洲崎飛行場に胴体着陸した（堀江、1965）。

航空機の離着陸する際は、向かい風が必要である。風向き・風速によっては着陸や離陸が難しい飛行場であったようだ。

ちなみに1945年1月に山下は爆弾の破片が足を貫通する傷を負って香取基地に戻り、後述する第二御盾特別攻撃隊の出撃に際し、硫黄島に関する貴重な情報を提供した（肥田、1983）。

1945年2月16日、アメリカ艦隊は硫黄島を取り囲み、艦砲射撃と空爆を開始した（「戦史叢書・中部太平洋陸軍作戦2」（防衛庁防衛研修所、1966））。同書には

「18日、父島を発進した天山艦上攻撃機（機長 土田稲穂上飛曹）は7時50分ごろ小型輸送船を発見したが、命中せず、米機と交戦後、8時40分父島に帰着した。（中略）父島に対しても艦上機延約250機が来襲した。同夜21時半ころ海軍第九〇三航空隊父島派遣隊の艦攻（天山）二機と陸軍飛行第百十戦隊（浜松）の重爆二機はそれぞれ超低空で硫黄島海域の米艦艇を攻撃、高速輸送船、掃海艇各一隻撃破の戦果を挙げたが、三機が自爆未帰還になった。注：米海兵隊戦史「硫黄島」によれば同日21時ごろ、日本機の空襲により高速掃海艇（戦死・行方不明5負傷9）、上陸用高速輸送艦（APD・戦死行方不明42、負傷29）各1に損害を受けたという」

という記述がある。

ところが、「戦史叢書・海軍航空概史」（防衛庁防衛研修所、1976）には「2月18日、天山二機で特別攻撃を行い、駆逐艦ゲーンブルと高速輸送艦グレスマンが損傷している」という記述があった（ただし、原文献が記載されていない）。防衛研究所で資料を探したところ、以下のような特別攻撃の命令書を発見した（「昭和二十年 硫黄島方面電信綴」（日本海軍、1945））。

「二一七 受信一五五九 訳了一六四五 電〇八二四 作概〇

訳始一六二三

航本

作戦緊急

発硫黄島基地

着九〇三空父島派遣隊

戦連合艦隊・三航空艦隊 父根

機密第一七五一番電

発E二空襲部隊指揮官

宛天山隊指揮官

一、天山二機（爆装）明一八日未明発進硫黄島南方にある敵大型輸送船に対し特別攻撃を実施すべし

通九一七四呂一Bガ四（一〇二〇〇kc）父通 廣田（河田）」

この命令書の存在により2月18日の天山の攻撃は特別攻撃であったことがわかった。また、同じ「昭和二十年 硫黄島方面電信綴」には、以下のような記述もあり、この攻撃が特別攻撃として位置づけられていることがわかる。

「二一八 受信一三三四 訳了一五二五 電〇八六一三 作概〇

訳始一四二五

航本

作戦緊急

発九〇三空父島派遣隊

着硫黄島航空基地

報連合艦隊・三航空艦隊 父根

機密第一八二〇二番電

一、天山特攻戦闘概報 （二月一八日）

二番機（機長土田稲穂）〇五二〇父島発進〇六一〇戦場到着（艦砲により硫黄島付近なると確認）天候小雨雲高二〇〇米視界二軒〇七五〇迄目標搜索小型輸送艦を発見爆撃高度五〇米艦首五米に着水煙艦体を覆うも攻撃時グラマン一機と空戦視界不良のため戦果を確認せず〇八四〇帰着

二、（中略）

三、被害なし

四、明十九日〇四三〇発攻撃再挙の予定

（以下略）」

この攻撃が成功であったと推測する電文（硫黄島航空基地発同日一一〇〇発）も見つかった。「天山特攻の一機の攻撃状況は視認せざるも電信により命中確実なるものと認む」（アメリカ軍の通信状況を傍受し、判断したものと思われる）。また、浜松基地から攻撃を行った陸軍四式重爆撃機「飛龍」（硫黄島擂鉢山山頂の第二御盾特別攻撃隊の碑の左面に

は「陸軍浜松教指導飛行師団第一一〇戦隊並びに第六〇戦隊（四式重爆撃機）及び第二独立飛行隊（九七式重爆撃機）を以て爆撃する」と記されている）による攻撃状況に関するものと思われる電文（父島通信隊）では「一八日二二〇〇硫黄島付近において敵艦日本双発機の直撃弾を中央に受け四カ所爆破死傷者多数を生ず救援要すと」と述べられている（アメリカ軍の通信状況を傍受し、判断したものと思われる）。

天山二番機が再攻撃を行ったかどうか、一番機はどうなったのかは電文には記載されていない。

アメリカ側の記録を見てみよう。Morison（1960）は、以下のように述べている。

「(2月18日、硫黄島上陸予定日D-day minus 1) 2130に小規模な敵の空襲があった。機雷掃海駆逐艦Gambleは2つの250ポンド爆弾が艦中央部に命中し、そのうち1つは機関室の後ろで爆発し、大きな被害を受け、竜骨の近くに穴が二つ開いた。5人が戦死あるいは行方不明となり、9人が負傷した。Blessman（注：戦史叢書に出てくる高速輸送艦グレスマンのことか？）には、船尾から接近してきた飛行機から落下した爆弾が機関室の前と軍旗掲揚所に落ちた。42名が死亡または行方不明となり、29人が負傷した。」

前掲の「戦史叢書・中部太平洋陸軍作戦2」（防衛庁防衛研修所、1966）の記録と一致する。駆逐艦Gambleへの攻撃は日本双発機（重爆）によるものと考えられるが、Blessmanへの攻撃が父島派遣隊の天山の特別攻撃によるものだと確定できない。しかし、爆弾や魚雷を投下後に敵艦へ体当たりする特別攻撃行われていたことを考えれば、命令を受けた天山2機は特別攻撃として出撃した可能性が極めて高い。

特別攻撃隊に関しては、多くの書物が出版され、攻撃が行われた日時、攻撃隊の名前、隊員の氏名などが残されている。様々な文献を調べたが、2月18日の天山による特別攻撃については「戦史叢書・海軍航空概史」と「昭和20年硫黄島方面電信綴」以外には載っていなかった。言わば「知られざる特別攻撃」である。父島より特別攻撃が行われたことが明らかになり、洲崎飛行場は硫黄島攻防戦における重要な拠点基地であったことが確認できた。

硫黄島攻撃の米艦船への特別攻撃は21日にも行われている。第二御盾特別攻撃隊である。再び「戦史叢書・中部太平洋陸軍作戦2」（防衛庁防衛研修所、1966）より引用する。

「二月一九日（注：アメリカ海兵隊が硫黄島に上陸を開始した日）寺岡（注：謹平中将）第三航空艦隊司令長官は、第六〇一海軍航空隊司令杉山利一大佐に対し、第二御盾特別攻撃隊（長 村岡

弘大尉)の編成を命じ、硫黄島周辺敵艦船等に対する攻撃を準備中であった。

同特攻隊は二月二一日、折からの悪天候(にわか雨、北東風10米/秒)を利用して木更津基地(注:香取基地の間違い)を発進、八丈島基地を経由して同日十六〇六から十八五十の間、艦上戦闘機(零戦)九、艦上攻撃機(天山)六、艦上爆撃機(彗星)一〇合計二五機のうち一一機をもって硫黄島周辺の米艦船に奇襲体当たりを取行、護衛空母一隻轟沈、空母一隻大破、護符空母一隻小破、貨物輸送船一隻損傷の戦果をあげたが、わが方も自爆未帰還一八機の損害を受け、零戦三機だけが無事父島に帰還した。」

この攻撃については、六〇一空の艦攻隊長であった肥田(1983)が出撃前の様子や攻撃中の電信について、詳細な記録を残している。

アメリカ海軍の記録であるモリソン戦史「太平洋の勝利(『History of United States naval operations in World War II, Victory in the Pacific』)」(Morison, 1960)には、日本軍機の攻撃状況について次のように述べてられている。

「2月21日夜、日本軍の空襲により硫黄島東方約70kmで行動中の護衛空母ビスマーク・シー Bismarck Seaは炎上爆発し、同17時5分総員退艦、934名の乗組員中217名が戦死し同艦は沈没した。また空母サラトガ Saratogaは同島北西約56km付近で17時ごろ日本軍特攻機の爆撃一発の命中及び二機の体当たり、次いで18時46分2機の体当たりで七カ所に損傷、戦死行方不明123名、角傷192名、艦上機の炎上放棄36機、海上不時着6機の大被害を受け、自力でエニウートク島に帰投したが、修理のため3か月以上作戦不能となった。同じころ、護衛空母ルンガ・ポイント Lunga Pointは一機の体当たりに触れ火災が発生したが、戦死者もなくすぐに鎮火した。なお硫黄島南方約80km付近で行動中の貨物輸送船ケオック Keokukは、同日17時20分特攻機1機の体当たりにより火災が発生し、戦死17、負傷44の損害を受けたが、18時50分ごろ鎮火した。」

第二御盾特別攻撃隊の詳細については、「特別攻撃隊の記録・海軍編」(押尾、2005)にも載せられている。父島に関係する部分を抜粋すると、

「第一次攻撃隊の戦闘機隊の1番機岩下泉蔵中尉は戦果確認任務を完遂し、単機父島飛行場に降着した。」

「第二次攻撃隊は硫黄島40哩で敵戦闘機隊と空戦となり、松重幸人一飛曹、林光男二飛曹のみ父島飛行場に降着した。(同じ戦闘に加わった)第三次攻撃隊の柳原康男少尉は、父島飛行場に着陸を試みたが、失敗し戦死した(いずれの機体も直掩の零戦)」。

「第三次攻撃隊は父島上空でF6F（戦闘機）10機と交戦、彗星隊の1、2番機は被弾し父島飛行場に不時着。この際、1番機小柳義男少尉機（新谷淳滋上飛曹同乗）は着陸時に大破した。」

「第四次攻撃隊の天山（艦上攻撃機・爆装）4機の内、1番機定森肇中尉機（木須奨一飛曹、岡本秀一二飛曹同乗）が故障により父島飛行場に不時着した。」

この攻撃で生き残った掩護機の零戦のパイロット岩下泉蔵の証言の概略を以下に述べる（岩下、1955）。

「六〇一航空隊・戦闘三一〇飛行隊の小隊長であった岩下は第二御盾特別攻撃隊の援護のため、4機の零戦で香取基地を出撃した。「掩護終了後に父島の飛行場に帰投し、そこで爆装して特別攻撃を行え」という命令を受けていた。硫黄島付近で敵グラマン機と戦闘中に、空母に水柱があがり、大火災を起こすのを目撃した。戦場を離脱し、父島に着陸した。父島の飛行場には、戦闘機4機と艦爆2機、艦攻1機が帰還したが、零戦2機と艦爆1機が使えるだけで、戦闘機2機と艦爆1機、艦攻1機はすべて大破していた。岩下の零戦と使用可能な零戦・艦爆は振分山飛行機壕の中に入れた。部下の2機も帰ってきたのだが、その内1機は飛行場南の海面に落下し、みるみるうちに沈んでいってしまった（注：小笠原高校元教諭、土屋智が2007年に象鼻崎近くの海底で発見したプロペラとエンジンはこの機体かも知れない。2009年に、筆者が調査し、プロペラの長さが約1.4m



図5 象鼻崎付近の海中に沈んでいる零戦のプロペラとエンジン（2009.11.2.6撮影）

であることなどから、零戦である可能性が高い（図5）。また、筆者は、象鼻崎と焼場海岸の間の海底で同様のプロペラ1枚を発見した）。結局使える機体は零戦3機、彗星艦爆1機になった。

岩下は爆弾を装備して特攻したいと父島航空隊に頼んだが、250キロ爆弾はあるが、懸垂金具がなく装着できないとのことであった。そこで、硫黄島基地を銃撃することになった。彼らが出撃できるようにするため、2000人の兵士が洲崎飛行場の整備を徹夜で行った。1機の零戦が離陸前にプロペラを傷めたので、2月24日の朝4:30、2機で洲崎飛行場を離陸した。ところが二番機がついてこないうえに、岩下機の機銃が発射できないことが判明。引き返し見ると、探照灯が海面を照らしていたので、二番機が海面に墜落したことを知った。着陸する時暗かったこともあり着陸に失敗（野羊山側の崖に翼の先端が接触した）、エンジンが炎上し始めたので、脱出し、病院で手当を受けた。

結局残った彗星艦爆は爆弾を積み、3月1日夕方、硫黄島に向かった。」

この彗星艦爆については、押尾（2005）は次のように記述している。

「3月1日、第三次攻撃隊の2番機小林義男上飛曹機（川崎直飛行兵長が同乗）は、一六〇五、父島飛行場を単機発進。第二御盾隊の殿機として硫黄島周辺の敵艦船に薄暮攻撃を敢行、散華した。」

このように、父島にたどり着いた4機の零戦のうち、2機は着陸に失敗、1機は離陸に失敗、同じく2機の彗星のうち1機は着陸時に大破、1機の天山が不時着している。洲崎の北、豆腐岩沖の水深約30mにある零戦の前半は2月24日に離陸に失敗した二番機の零戦かもしれない（機首にある7.7mm機銃から、零戦であると判断できる）。第五震洋特別攻撃隊の中村（1989）は硫黄島特別攻撃の際、洲崎飛行場に不時着した3機の零戦の残骸を目撃している。

VII. 硫黄島作戦時の父島への爆撃と空母エンタープライズ搭載機の洲崎飛行場偵察

「アメリカ戦略爆撃調査団報告書」（日本降伏後、トルーマン大統領は日本に対する空襲の効果を公正かつ専門的に研究し、空軍力の戦略的重要性と将来性を分析して、今後のアメリカの戦略に役立てる報告を作成することを命じ、調査団先遣隊は9月4日横浜に上陸、軍人、政治家、官吏、財界等約700名を尋問、さらに3500名もの一般市民への聞き取り調査をはじめ、多くの関係文書を押収した。調査団は12月までに調査を終え、1946年7月までに108巻の報告書を完成させた）に父島に対する攻撃の記録が62部隊分（表1）載せら

上條：父島洲崎の変遷について（その2）

表1 「アメリカ戦略爆撃調査団報告書」に記録された小笠原への攻撃

No	月	日	時刻	攻撃目標								空母		航空機					
				父島	洲崎	航空機	水上機 基地	船舶	海軍施設	大村	母島	その他	空母	僚艦の空母	F6F	F4U	FM	TBM	SB2D
1	2	17	0800		○						○		LungaPoint	MakinIsland BismarkSea			4		
2	2	17	1550			一式陸攻		SD*25					PetrofBay				4		
3	2	17	1600			○		小船舶					Sargemt bay				4		
4	2	17	0830,0853,0905		○			小船舶			小船舶		MakinIsland				4		
5	2	18	1240		○			○					Randolph		22			12	8
6	2	18	1240		○				○				Yorktown	Randolph Cabot Langley	20			15	14
7	2	18	1245	港									Randolph		22			12	8
8	2	18	1245	写真									Randolph		22			12	8
9	2	18	1250							港			Yorktown	1CV&2CVL	20			15	14
10	2	18	1250		○				○				Cabot		8			9	
11	2	18	1300		○			商船					Randolph	Cabot Langley	26			12	8
12	2	18	1400		○		○						Hornet						12
13	2	18	1410		○		○						Hornet	TG58.1					12
14	2	18	1410	○									Wasp	Hornet Bennington		16			
15	2	18	1415		○								SteamerBay	SargentBay PetrofBay			4	1	
16	2	18	1435		飛行機			小型船舶					Sargemt bay	NatomaBay SteamerBay			4		
17	2	18	1450		○			SD*15					PetrofBay	SargentBay SteamerBay			4		
18	2	18	1215-1245					○	○				Yorktown	Langley Cabot	20			15	14
19	2	18	1345-1430		○		○	○	○				Hornet		23			12	
20	2	18	400-151							無線基地			Wasp	Bennington Hornet	8	24		12	
21	2	18						5000tSBSD *6-10		○			Wasp		8	24		12	
22	2	19	1600-1730						○		東港 港湾施設	西島 2000 t SB	Lexington		12				
23	2	20	0920-1120	○								磐島西島	Yorktown		16				
24	2	20		○									Yorktown		16				
25	2	22	0915-1105	○							○	智島	Yorktown		16				
26	2	23	0910			○							Sargemt bay				8	1	
27	2	23	1500		○						7000tFTA		Hornet	BelleauWood	12				
28	2	23	1145-1200		○						東港Cove		Wasp	Bennington	4	8			
29	2	24	1510				○	700tFTD	埠頭				Enterprise		5			6	
30	2	24	1530-1625	○				○			○		Enterprise		5			6	
31	2	24		偵察									Enterprise		1				
32	2	26	0600		○								Enterprise		4			5	
33	2	26	0600					2000tSB×2 300tFTD					Enterprise		4			6	
34	2	27	1835	○									Enterprise		2			6	
35	2	27	1900		○		○						Enterprise		2			4	
36	2	28	1300		○			○	○				Langley		8				
37	2	28	1755	偵察									Enterprise		2				
38	3	1	1845-1900						○				Enterprise		2			4	
39	3	1		偵察									Enterprise		2			4	
40	3	2		偵察									Enterprise		2				
41	3	2		写真							写真		Enterprise		1			6	
42	3	3	0840					5500-5800tFT*6 150-200tSD*6 7000tSA					Sargemt bay					8	
43	3	3	1300		○				埠頭ドック				SreamerBay				8		
44	3	3	1920		○				○				Enterprise		2			2	
45	3	3	1340-1425		○		○				輸送艦		Enterprise	Tukagi NotomaBay	1			6	
46	3	3		○									Enterprise		2			4	
47	3	5	1925-1825		○				埠頭建物		沖村		Enterprise		2			5	
48	3	5		○									Enterprise		2			4	
49	3	6	1905		○						沖村		Enterprise		4			2	
50	3	6	0545-0615			○	○				沖村		Enterprise					2	
51	3	6											Enterprise		4				
52	3	6		○									Enterprise		2			4	
53	3	7	0440-0630		○								Enterprise		2			4	
54	3	7	0705-0915		○			1200tFTD					SaginawBay	Anzio			4		
55	3	7		○									Enterprise		2			4	
56	3	7		○									Enterprise		4				
57	3	8	1830-1910,1840		○						北村		Enterprise		2			3	
58	3	8		○									Enterprise		4				
59	3	8		○									Enterprise		2			4	
60	3	9	1830-1935		○								Enterprise		4			2	
61	3	9		○									Enterprise		4				
62	3	9		○									Enterprise		2			4	

○は攻撃目標となったことを示す

航空機のうち戦闘機は F 6 F (Hellcat) と F 4 U (Corsair) FM (Wildcat)、爆撃機は TBM (Avenger) と SB2C (Helldiver)

れていた（アメリカ戦略爆撃調査団、1944-1945）。いずれも空母からの艦載機の攻撃で1945年の2月17日から3月9日までの期間である。ちょうど硫黄島作戦の進行している期間である。その内25回の攻撃で、洲崎飛行場は攻撃目標にされている。

62回の攻撃のうち、空母エンタープライズEnterprise (CV-7,「BIG E」)の愛称で知られる。太平洋開戦以来、数々の海戦に参加し、損傷を負いながらも生きながらえたヨークタウン級の空母が30回の攻撃を行っている。エンタープライズは2月24日から3月9日まで、父島沖にいたことになる（しかし、「The Big E: The Story of the Uss Enterprise」(Stafford, 1962)には「3月9日夕方に父島を攻撃した最後の飛行機が着艦ワイヤーに機体を引っかけた1分後、エンタープライズはウルシー環礁に向け艦首を向けた。」の一文しか載っていない）。

2月24日にはエンタープライズの偵察機が洲崎飛行場の写真を真上から撮影している(図6、7)。この戦闘報告書によると、

「VF90（戦闘機隊）離陸1945.2.24. 14：15 目的「母島と父島への偵察と攻撃」帰還時間17：

30

参加飛行機 F6F5E（ヘルキャット戦闘機）4機（1機墜落）ロケット弾6

F6F5P（ヘルキャット戦闘機）1機（全機帰還）

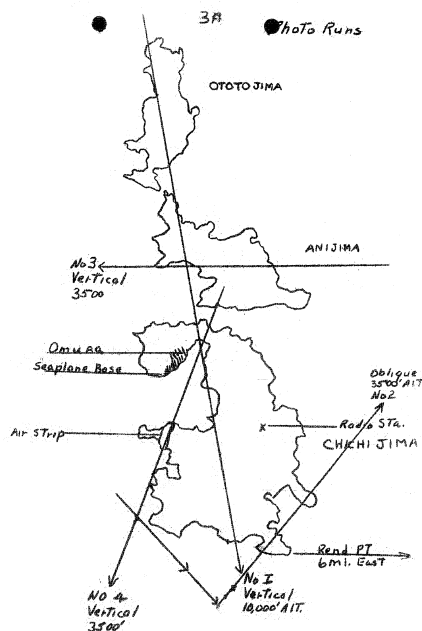


図6 エンタープライズ偵察機の写真撮影飛行ルート(アメリカ戦略爆撃調査団、1944-1945)

VT90（爆撃機隊）より TBM3D（アヴェンジャー雷撃機）が6機（全機帰還）

敵機 BETTYS（一式陸上攻撃機）2機（標準日本塗装）

U/IS/E（艦爆・戦闘機のことか？）2（日の丸に緑色、まだら模様）

破壊した飛行機 1 破壊不確実 0 損傷 0

目標 輸送船700トンにロケット弾5発、命中0

大村港付近の建物（100×150）ロケット弾2発 命中2

大村港地区にロケット弾2発 命中2

滑走路の飛行機にロケット弾2発 未確認

無線通信施設（50×100）にロケット弾2発 未確認

水上飛行機スロープにロケット弾5発 未確認

戦略と作戦データ（抄訳）

VF90は母島で小さい輸送船を見つけたので、ロケット弾を5発撃ったが、成果未確認。後でこ



図7 1944年2月24日洲崎飛行場の航空写真（アメリカ戦略爆撃調査団、1944-1945）

の船が東港の北で遺棄されているのを発見した。

そのあと、父島に飛行し、10000フィート上空から東から西へ降下し、ロケット弾5発を1500フィート上空から海軍基地の北にある建物や、水上飛行機の基地に発射した。2つが命中し、建物から煙が上がった。

フランクリン少尉とウッズ少尉（この2機は戦闘機）他VT904機の爆撃機は父島に行った。飛行場の東側に2機、西側に2機、滑走路の中央に2機あった。東側の2機は戦闘機である。西側の1機は一式陸攻（Betty）、もう一機はT/E U/I（急降下爆撃機？）であった。滑走路の中央にあるのは一式陸攻で既に損傷している。唯一無傷の飛行機は西側にある一式陸攻だけだと思われ、今回の機銃掃射の目標になっていた。この飛行機は徹底的に機銃掃射を浴び、攻撃中煙を上げていたので、損傷されたようだ。フランクリンは山の上の無線基地に2発のロケット攻撃をした。フランクリンは4発のロケット弾が残っていたので、西側の飛行機を攻撃しようとした。3回目の攻撃は北から侵入し、飛行場に向け降下し、飛行場を機銃掃射しながら、ロケット弾を飛行機に向け発射した。離脱しようとした時、ウッズは機体が攻撃を受けていたことに気付いた。油圧が急激に下がり、燃料タンクやレーダー、ロケットなどの武器が動かなくなった。彼は緊急事態であることを駆逐艦ボールハミルトンに連絡した。ウッズは170° 40マイル離れたところまで飛行機をとばし、うまく緊急着水した。パイロット達は18：25駆逐艦ボールハミルトンに救助された。

ヘットワース中尉は写真撮影パイロットで、攻撃中に父島を北側から縦に飛行し、写真を撮り、その後、母島に写真撮影に行った。彼は再び父島に戻り戦闘機隊や爆撃機隊に合流し、母艦に帰った。写真撮影は3500～5000フィートの高度で時速220ノットで行われた。3500フィートでの撮影では雲の下だったので、天候は良かったのだが、カメラの調子が良くなく、多くの写真は不満足な出来だった。

攻撃は概ねうまくいった。幾つかの場所の火の手が上がった。でもこれだけでは十分ではない。戦闘機一機が撃たれてパイロットは海に落とされてしまった。太陽を背にしての攻撃では敵は撃ってこなかった。夜の攻撃でも撃ってこないで、敵の対空砲火はレーダーと連動していないことが分かる。この事実は効果的に使える。」

この写真を見ると以下のようなことがわかった。

- ①現在の地図と重ねても海岸線はほぼ同じ（北側が少し削れている）
- ②爆弾でできた穴が多数空いている。
- ③飯盛山の東側に大型飛行機が見える（一式陸攻？）
- ④その北側に小型機が二機見える。
- ⑤飛行場中央の飛行機は米軍パイロットの言っていた一式陸攻か？小型機に見えるが。

- ⑥二見湾側の海岸近くに3機の小型機。野羊山側の2機は形が歪んでいる。
- ⑦飛行場の北東側角付近に小型機がある。
- ⑧振分山の飛行機壕の方に道があり、飛行機が通ったような跡がある。
- ⑨飛行場の東端には南北にレールのようなものが引かれている。
- ⑩滑走路の長さは最大800mしかない。

VIII. アメリカ陸軍機による洲崎飛行場への攻撃

「第二時大戦に於けるアメリカ陸軍航空軍戦闘日誌」(U.S. Army Air Forces in World War II Combat Chronology 1941 - 1945) (The Office of Air Force History, 1973) の第7空軍の記録に、小笠原（表2）および硫黄島へのアメリカ陸軍機の爆撃記録が記載されている（なお、硫黄島に対しては、第7空軍が1944年8月10日にサイパンから飛び立ったB-24による攻撃を皮切りに、8月10回、9月20回、10月15回、11月18回、12月50回、1945年1月64回、2月37回の攻撃を行い、第11空軍はB-24とB-25で8回、第20空軍はB-29で7回攻

表2 「第二時大戦に於けるアメリカ陸軍航空軍戦闘日誌」に記録された小笠原への攻撃

No	月	日	昼夜	軍用機	機数	基地	攻撃を受けた島	洲崎	その他攻撃目標
1	8	12		B-24		サイパン	父	洲崎飛行場	船舶、水上機基地、
2	8	16		B-24		サイパン	父		
3	9	8		B-24		サイパン	父		船舶
4	9	11		B-24		サイパン	父		沖の船舶
5	9	19		B-24	29	サイパン	父		船舶
6	9	22		B-24	15	サイパン	父		船舶
7	9	23		B-24	15	サイパン	父母兄		
8	9	24		B-24	18	サイパン	父		船舶、港湾
9	9	28		B-24		サイパン	父		港湾
10	10	2		B-24		サイパン	父		西岸船舶
11	10	3		B-24		サイパン	ボニン		船舶
12	10	12		B-24		サイパン	父 母		船舶、港湾 南の船舶
13	10	17		B-24	11	サイパン	母		船舶、沖村市街
14	10	18		B-24		サイパン	母		
15	10	28		B-24		サイパン	母		
16	10	29		B-24	19	サイパン	父		
17	11	1		B-24	12	サイパン	父母硫黄	飛行場	船舶、倉庫
18	11	2		B-24	11	サイパン	父		
19	11	3		B-24	14	グアム	父母		船舶
20	11	6		B-24		サイパン	母 兄		沖村・東港の船舶
21	11	8		B-24		サイパン	父母		船舶
22	11	9		B-24		グアム	母		船舶、防空障地、沖村市街
23	11	15		B-24	6	グアム	父		二見湾
24	11	16		B-24	12	サイパン	父		船舶
25	11	16		B-24	2	サイパン	母		艇
26	11	16	夜	B-24	1	サイパン	ボニン		船舶
27	11	18		B-24		サイパン・グアム	父母		船舶
28	11	19		B-24	15	グアム	父母		船舶
29	11	21		B-24		グアム	父母		船舶、海軍沿岸施設
30	11	23		B-24	17	グアム	父 母		船舶 船舶、沖村市街
31	11	24		B-24	2	サイパン	父母		船舶

No	月	日	昼夜	軍用機	機数	基地	攻撃を受けた島	洲崎	その他攻撃目標
32	11	25		B-24	7	グアム	父母舅		
33	11	30		B-24	8	グアム	母		
34	12	24		B-24	23	サイパン	父		
35	12	27		B-24	21	サイパン	父		
36	1	2		B-24	12	グアム	母		
37	1	5		B-24		サイパン	父母		海軍艦砲射撃の空中観測
38	1	7		B-24	11	サイパン	父 母	洲崎飛行場	洲崎飛行場 沖村市街
39	1	18		B-24	19	サイパン	父母		海軍基地、沖村市街
40	1	19		B-24	7	サイパン	父		港湾施設
41	1	20		B-24	5	サイパン	母		沖村市街
42	2	4		B-24	10	グアム	母		沖村市街
43	2	6		B-24	10	グアム	弟父		大村市街
44	2	7		B-24		サイパン	母		沖村市街
45	2	12		B-24		グアム	父	洲崎飛行場	父島海軍基地
46	2	12	夜	B-24	8	グアム	父硫黄		
47	2	13		B-24	10	サイパン	母		
48	2	14	夜	B-24	4	グアム	父	洲崎飛行場	
49	2	15		B-24	12	サイパン	父	洲崎飛行場	
50	2	15	夜	B-24	5	サイパン	父硫黄		
51	2	16	夜	B-24	4	グアム	父	洲崎飛行場	
52	2	17	夜	B-24	5	サイパン	父		
53	2	18	夜	B-24	9	サイパン	父		
54	2	19	夜	B-24	8	サイパン	父		
55	2	20	夜	B-24	7	サイパン	父 母	飛行場	沖村市街
56	2	21	夜	B-24	6	グアム	父		
57	2	22	夜	B-24	6	グアム	父 母	飛行場	沖村市街
58	2	23	夜	B-24	7	グアム	父 母	飛行場	沖村市街
59	2	24	夜	B-24	5	グアム	父 母	飛行場	沖村市街
60	2	25	夜	B-24	8	グアム	父	飛行場	
61	2	27	夜	B-24	9	グアム	父	飛行場	大村市街、無線局
62	2	27	夜	B-24	9	サイパン	父		防空障地、無線局、大村市街
63	2	28		B-24	8	グアム	父	洲崎飛行場	
64	2	28	夜	重爆撃機	6	グアム	父	洲崎飛行場	
65	3	1		B-24	7	グアム	父	洲崎飛行場	
66	3	1		B-24	1	グアム	母		
67	3	1	夜	重爆撃機	5	グアム	父	洲崎飛行場	大村市街
68	3	2		B-24	7	グアム	父	飛行場	
69	3	2	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	大村市街
70	3	3		B-24	10	グアム	父	洲崎飛行場	
71	3	3	夜	B-24	4	グアム	父	洲崎飛行場	
72	3	4		B-24	10	グアム	父	洲崎飛行場	
73	3	4	夜	B-24	3	グアム	父	洲崎飛行場	
74	3	5		B-24	11	グアム	父	洲崎飛行場	
75	3	5	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
76	3	6		B-24	11	グアム	父	洲崎飛行場	
77	3	6	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
78	3	7		B-24	11	グアム	父母	洲崎飛行場	沖村市街
79	3	7	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
80	3	8		B-24	14	グアム	父	洲崎飛行場	
81	3	8	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
82	3	9		B-24	13	グアム	父	洲崎飛行場	
83	3	9	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
84	3	10		B-24	10	グアム	父	洲崎飛行場	
85	3	10	夜	B-24	9	グアム	父	洲崎飛行場	
86	3	11		B-24	11	グアム	父	洲崎飛行場	
87	3	11	夜	B-24	8	グアム	父	洲崎飛行場	
88	3	11		P-51		硫黄島	父母	洲崎飛行場	沖村、北村
89	3	12		P-51		硫黄島	母		沖村
90	3	12		B-24	8	グアム	父	洲崎飛行場	

上條：父島洲崎の変遷について（その2）

No	月	日	昼夜	軍用機	機数	基地	攻撃を受けた島	洲崎	その他攻撃目標
91	3	12	夜	B-24	8	グアム	父母	洲崎飛行場	沖村市街
92	3	13	夜	B-24	8	グアム	父	洲崎飛行場	
93	3	14		B-24	8	グアム	父	洲崎飛行場	
94	3	15		B-24	13	グアム	父	洲崎飛行場	
95	3	15	夜	B-24	3	グアム	父	洲崎飛行場	
96	3	16		B-24	13	グアム	父	洲崎飛行場	
97	3	16		P-51	16	硫黄島	父		貯蔵施設、砲陣地、無線・レーダー施設
98	3	16	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
99	3	17		B-24	11	グアム	父		
100	3	17	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
101	3	18		P-51	16	硫黄島	父		無線・レーダー施設、俘
102	3	18		B-24		グアム	父	洲崎飛行場	
103	3	18		B-24	1	グアム	母		
104	3	18	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
105	3	19		P-51	16	硫黄島	父	洲崎飛行場	貯蔵施設、無線施設
106	3	19		B-24	12	グアム	父	洲崎飛行場	無線施設
107	3	19	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
108	3	20		B-24	12	グアム	父	洲崎飛行場	
109	3	20	夜	B-24	4	グアム	父	洲崎飛行場	
110	3	21		P-51	16	硫黄島	父		兵舎、無線・レーダー施設
111	3	21		B-24	13	グアム	父	洲崎飛行場	
112	3	21	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
113	3	22		P-51	16	硫黄島	父		气象台、燃料貯蔵施設、レーダー施設
114	3	22		B-24	13	グアム	父	洲崎飛行場	
115	3	22	夜	B-24	4	グアム	父	洲崎飛行場	
116	3	23		P-51	16	硫黄島	父母兄		
117	3	23	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
118	3	24		P-51	16	硫黄島	父	洲崎飛行場	空軍・海軍・無線施設
119	3	24	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
120	3	25		P-51	16	硫黄島	父	洲崎飛行場	空軍・海軍・無線施設
121	3	25		P-51	16	硫黄島	父		レーダー施設、人口密集地帯
122	3	25	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
123	3	26		P-51	21	硫黄島	父	洲崎飛行場	
124	3	26		P-51	16	硫黄島	父 母		气象台、レーダー施設 北村市街
125	3	26	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
126	3	27		P-51	16	硫黄島	母		北村市街、爆弾貯蔵庫
127	3	27	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
128	3	28		P-51	15	硫黄島	父	洲崎飛行場	
129	3	28	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
130	3	29		P-51	16	硫黄島	母		
131	3	30	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
132	3	31		P-51	15	硫黄島	父		船舶、航空施設
133	3	31		P-51	16	硫黄島	父		港湾施設、船舶
134	3	31	夜	B-24	5	グアム	父	洲崎飛行場	
135	4	8	夜	夜間戦闘機	6	硫黄島	父母兄弟		
136	4	9		P-51	16	硫黄島	父		軍事施設
137	4	10	夜	夜間戦闘機	6	硫黄島	父母兄姪		
138	4	12	夜	夜間戦闘機	6	硫黄島	父母兄、北島？		
139	4	17		P-51	18	硫黄島	父		船舶
140	4	17		P-51	18	硫黄島	父		船舶
141	4	18	夜	P-61	3	硫黄島	父		レーダー施設、二見湾
142	4	19		P-51	8	硫黄島	父		二見港
143	4	19	夜	P-61	6	硫黄島	父母姪		
144	4	20		P-51	11	硫黄島	母		
145	5	2		P-51	12	硫黄島	父		無線通信所
146	6	4		P-51	8	硫黄島	父母		無線通信所、沖村
合計					1216				

B-24 4発の重爆撃機 コンソリデーター社製 愛称はリベレーター(Liberator)。
 P-51 単発の陸上戦闘機 ノースアメリカン社製 愛称はマスタング(Mustang)。
 P-61 双発の夜間戦闘機 ノースロップ社製 愛称はブラック・ウィドウ(Black widow)。

撃を行っている)。それによると、父島への最初の攻撃は1944年8月12日である（注：サイパンのアスリート（アイズレー）飛行場を基地とするアメリカ海軍の同型機種リベレーター（Hearn、2003）は7月19日に父島に初攻撃を行っている（夜明会、1983））。1944年から1945年1月までは船舶や港湾施設への攻撃が主で、洲崎飛行場への攻撃は3回しか記載されていない。洲崎飛行場にはほとんど航空機がなく、攻撃目標としての優先順位が低かったのだと考えられる。しかし、2月に入り、飛行場への攻撃が目立つようになる。2月20日からほぼ毎日のように飛行場への攻撃が行われている。この理由は、硫黄島上陸が2月19日に行われたことへの支援に加え、2月18日の天山の特別攻撃、21日の第二御盾特別攻撃隊の攻撃で洲崎飛行場が米軍にとって脅威になったことが考えられる。2月24日にエンタープライズの偵察機が撮影した写真には、爆弾であいた穴や破壊された飛行機が写っていたが、その後の攻撃で洲崎飛行場は徹底的に破壊されたのだろう。

また、米陸軍機の基地は10月まですべてサイパンであったが、11月に入るとグアムも使われはじめ、2月下旬からグアムが多くなっている。サイパンがB-29の基地として日本本土への空襲に使われるようになるにつれ、グアムの基地が使われるようになったのだろう。3月11日からは、硫黄島からP-51戦闘機（愛称マスタングMustang）とP-61夜間戦闘機（愛称ブラックウィドウBlackwidow）が飛来するようになった。

IX. 父島への攻撃は演習や実験か？

Stafford（1962）は8月31日から9月2日にかけて行われた空母エンタープライズ、フランクリンFranklin、軽空母サン・ジャシントSan Jacintoによる小笠原諸島父島・母島・兄島への攻撃について述べている。

「(8月31日の攻撃は) すべては一回の攻撃で終わった。父島は太平洋のアメリカの作戦に対する大きな脅威ではなかった。洲崎飛行場には飛行機は一機もいなかったし、二見港には大きな船舶がいなかった。(中略) この間、エンタープライズの古参の乗組員と航空群はぶつぶつと不平を漏らしていた。自分たちは二軍で野球をやらされている。戦いの中心から遙かに離れた、大して重要でない施設を攻撃させられている。(中略) 2隻の空母(新空母のフランクリン、サン・ジャシント)には、実地訓練が必要だった。新しい航空群に比較的軽い抵抗で実践を経験させることが必要だった。そうすれば次にもっと危険で重要な任務を割り当てられた時、自信を持って落ち着いてやれるだろう。」(ちなみ・サン・ジャシントの爆撃機アヴェンジャーのパイロットだったブッシュ(父)元大統領は9月2日の攻撃で撃墜され、漂流しているところを潜水艦に救助された(Stinnett, 1992))

元アメリカ海軍の将校（駆逐艦の副長）が執筆したルポルタージュなので、当時の海軍の作戦方針を必ずしも反映しているとは思えないが、父島が実戦訓練の場、新兵器の試験の場として利用された可能性はある。

前述した輸送船団と父島への艦砲射撃についての戦闘記録では、レーダーの性能や運用に関するコメントが細かく記載され、以下のように結論づけられている。

「船や、異なる目標へのレーダーの性能が評価されたことは特筆すべきだ。（中略）新たな問題が付随している現レーダーの限界を克服する装置の開発が、艦隊がとるべき道である。」

また、「アメリカ戦略爆撃調査団報告書」に含まれる1945年3月6日、エンタープライズの夜間戦闘機F6F-3N（レーダーを備えている）2機による報告書では、4機の日本軍レーダー装置の分析に関する報告が載せられている。残念ながらマイクロフィルムの文字が判別困難で内容は細かくわからないが、数値（詳細不明）とレーダーの波形の変化が図示されている。また、レーダーが関知する範囲についても記述しているようだ（北硫黄島から40マイルの測点、硫黄島などの文字が並んでいる）。

このようなことから、父島への攻撃は硫黄島への中継基地としての機能（船舶や港湾施など）や通信施設を破壊することが主な目的であったが、新米の航空群の演習、レーダーやロケット弾（最初爆撃機は爆弾を投下したが、壕内の兵力には効果があまりないためロケット弾による攻撃を行うようになった。父島に落下しているP51DとTBMの主翼の下にはロケット弾の装着装置がある）などの新兵器や戦闘法の試験としての意味も強かったと判断できる。父島への攻撃で得られた知識や経験は、硫黄島、沖縄などの戦いで生かされたのだろう。

しかし、父島の日本軍もただ攻撃されただけではない。対空砲火により米軍機を撃墜している。今も父島にはアメリカ軍機の残骸が残っている。夜明平にはP51D陸軍戦闘マスタングMustang、境浦と兄島滝之浦（水平尾翼のみ）にはSB2C海軍艦上爆撃機ヘルダイバーHelldiver、吹割山にはTBM海軍艦上雷撃機（爆撃機としても使用）アヴェンジャーAvenger、製氷海岸にはB-24爆撃機リベレーターLiberatorの主脚（1944年8月4日23：00に高射機関銃の銃撃により海軍のリベレーターの胴体後半が奥村の特別根拠地隊付近に墜落し、1名の搭乗員は無傷（6日あるいは7日に銃剣で刺されて処刑され、後にWarren.A.Hindenlangであることが判明）で、1名は傷を負い（病室で死亡）、他乗員3名は遺体で発見された（米原、1969；夜明会、1983；Bradley、2003；Hearn、2003；エルドリッチ、2008）。この機体のものである可能性が高い。）などがある。Hearn（2003）に

よると、100人以上の米軍の飛行士が父島付近に墜落したという（日本軍の捕虜となった飛行士たちの運命については、堀江（1984）、Hearn（2003）、Bradley（2003）、エルドリッチ（2008）に詳しく述べられている。日本軍に拘束された10名の捕虜のうち8名は処刑され、そのうち3名の肉体の一部は宴会で饗された（堀江、1984）。終戦後、この事実を知ったアメリカ軍は、被疑者をグアムに送った。裁判の結果、立花中将はじめ5人が絞首刑となった）。

X. 洲崎に埋まっている海軍一式陸上攻撃機

日本海軍の双発の爆撃機、一式陸上攻撃機の残骸が返還当時、洲崎の飛行場跡に残っていた。図8は小笠原村教育委員会所蔵の写真のコピーである（田畑、1993）。4枚のプロペラ、機首の風防の形から一式陸攻の二二型以降であると判断できる（小笠原村発行の「村民便り縮刷版」（小笠原村、1973）にも同じ機体の似たアングルの写真があるが、左翼上二枚のプロペラは切り取られている）。回りの様子からは判断するのは難しいが、左側に山陰が見えるので、エンタープライズの艦載機が撮影した、飯盛山の下にあった大型機なのであろう。島の人の証言によると、返還後、飯盛山下の現在の砂置き場付近にあった一式陸攻を建設会社がブルドーザーで埋めたとのことである。この機体はいつ飛来したのだろうか？

戦史叢書「本土決戦準備〈1〉関東の防衛」（防衛庁防衛研修所、1971）には、硫黄島に向け中攻（一式陸攻や九六式陸攻のこと）の攻撃の記録が以下のように記されている。



図8 洲崎に残されていた一式陸上攻撃機の残骸（田畑、1993）

「1945年2月19日2機（1機未帰還）、21日夕2機（全機未帰還）、23日5機（未帰還2）、28日夜半木更津発進、1機未帰還、3月8日夜半木更津発進全弾命中、1機父島に不時着、25日、午後5機（3機未帰還）。」

3月8日の父島に不時着以外、父島に一式陸攻が降り立った記録はなかった。

木更津航空隊の根本正良（1945年2月～3月に硫黄島との最後の物資と傷病兵の空輸往復行1回と硫黄島夜間爆撃行2回を行った機の機長）は「硫黄島夜間爆撃行第一部・第二部」（根本、1989-1990）の中で硫黄島方面行動した中攻について次のように記録している。

2月10日 硫黄島強行輸送作戦自爆2機 46名戦死（同乗者含む）

22日 第二御盾特攻隊支援のため、牽制作戦として3機が出撃したが橋本機は消息を絶ち、吉田機は離陸直後エンジンより発火炎上、東京湾に墜落、全員死亡。1機は引き返した。

23日 7機が夜間爆撃に出撃したが、3機天候不良で引返し、2機はエンジン不調で引き返し、進撃していった2機は連絡なく未帰還。

24日 根本機を含む4機が夜間爆撃に向かい、根本機は爆撃に成功したが、川崎機は硫黄島周辺の艦艇の砲火が左翼に命中し、片舷飛行となり父島沖に墜落炎上。幸い搭乗員は脱出し父島に収容された。1機は一瞬にして撃墜されたらしく未帰還。1機は同様被弾し攻撃不可能となり引き返して豊橋基地に不時着した。

3月25日 硫黄島夜間爆撃の命令が下り、中攻8機が飛び立った。根本機は爆撃に成功、2機は接触事故で引き返し、3機は未帰還、帰還できたのは3機であった。1945年1月から3月5日までに根本の所属する木更津基地攻撃第七〇四飛行隊は硫黄島戦で34機の中攻と272名を失った。

この記述からは、戦後洲崎飛行場に残っていた一式陸攻の残骸（エンタープライズの偵察機が撮影した2月24日以前に不時着したもの）に当てはまるものはなかった（未帰還は航路を見失った場合が多かっただろうと根本は推測している）。

「昭和20年硫黄島方面電信綴」（日本海軍、1945）の2月19日鹿屋空（鹿児島県の鹿屋航空隊）発の電信には「七〇四飛行隊一式陸攻四機攻撃帰投基地木更津父島または八丈島に不時着することあるべし」とあるので、硫黄島攻撃に向かった一式陸攻が父島に不時着した可能性が高い。

XI. おわりに

父島の洲崎飛行場が太平洋戦争で果たした役割について、日本軍とアメリカ軍関係の記録、島民の方々などへの聞き取りなどを元に見てきた。今は自動車教習コースや建設業者の砂利置き場にしか使われていない洲崎飛行場跡だが、かつては激しい戦闘が行われ、硫黄島支援の特別攻撃の飛行機が飛び立った場所であることがわかった。論文の最後に際し、戦争で犠牲になった方々のご冥福をお祈りしたい。

謝辞

小笠原在住の方々には、貴重や情報やご意見をうかがった。父島在住の門出京子さんと瀬堀五郎平さんには洲崎の飛行場に関する情報を提供していただいた。ブルームの村井徳資朗さんには洲崎飛行場の写真についての情報や軍用機などの軍事関係の情報を教えていただいた。軍事関係の情報収集については、小笠原水産センターの太田健一さんにもご協力いただいた。洲崎付近に墜落している飛行機の情報は笠井信利さん（マリンサービス・フィッシュアイ）、島田克巳さん（ポニンプルーシマ）、土屋智先生（現深川高校）に教えていただいた。旧島民で財団法人小笠原協会の天野厚生理事には当時の洲崎の様子を教えていただいた。元陸軍通信部隊長の吉岡健児さんには、父島の陸軍の状況や艦砲射撃についての情報を教えていただいた。

小笠原村教育委員会のセーボレー孝課長・島田絹子副参事、防衛省防衛研究所、国会図書館憲政資料室、財団法人小笠原協会には貴重な文献を閲覧させていただき、情報を提供していただいた。感謝申し上げます。

文 献

秋本実（1981）：戦歴・塗装・マーキング。『艦上攻撃機天山』丸メカニック、Vol.30, pp.72-75.

天野安秀（1995）：失われた洲崎を偲んで。小笠原協会機関誌「小笠原」、Vol.129, pp.2-4.

天野安秀（1998）：父島を思う。小笠原諸島返還30周年記念誌、小笠原諸島返還30周年記念事業実行委員会、pp.185-199.

アメリカ戦略爆撃調査団（1944-1945）：『Records of the U.S. Strategic Bombing Survey, Entry55, Security-Classified Carrier-Based Navy and Marine Corps Aircraft Action Reports』アメリカ戦略爆撃調査団.

防衛庁防衛研修所（1966）：『戦史叢書・中部太平洋陸軍作戦2』朝雲新聞社、624p.

防衛庁防衛研修所（1968）：『戦史叢書・マリアナ沖海戦』朝雲新聞社、638p.

- 防衛庁防衛研修所（1971）：『戦史叢書・本土決戦準備〈1〉関東の防衛』朝雲新聞社、627p.
- 防衛庁防衛研修所（1976）：『戦史叢書・海軍航空概史』朝雲新聞社、476p.
- Bradley, J. (2003) : *Playboys : A True Story of Courage*. Little, Brown and Company, 592p.
- エルドリッチ, R. D. (2008) : 『硫黄島と小笠原をめぐる日米関係』南方新社、526p.
- Hearn, C. G. (2003) : *Sorties into Hell: The Hidden War on Chichi Jima*. Praeger Pub, 248p.
- 堀江芳孝（1965）：『闘魂 硫黄島』恒文社、308p.
- 堀江芳孝（1994）：父島人肉事件―師団長も食った―. 歴史と人物、Vol.73, No.14, pp.120-135.
- 岩下泉蔵（1955）：『硫黄島特攻掩護記』今日の話題・戦記版、第七集、pp.7-38.
- 上條明弘（2009）：父島洲崎の変遷について（その1）. 首都大学東京小笠原研究年報、Vol.32、p.49-69.
- 木俣滋郎（1986）：『日本水雷戦史』図書出版社、694p.
- 木俣滋郎（1994）：『日本海防艦戦史』図書出版社、299p.
- 肥田真幸（1983）：『青春天山雷撃隊』光人社、238p.
- 小池克也（1984）：駆逐艦. 『第2次大戦のアメリカ軍艦』世界の艦船No.337、pp79-112.
- 小坂典久ほか（1984）：『第2次大戦のアメリカ軍艦』世界の艦船No.337.
- 国本康文（2001）：アメリカ巡洋艦の主砲. 『第2次大戦のアメリカ巡洋艦』世界の艦船No.578、pp162-167.
- 倉田洋二（1993）：『増補版寫眞帳小笠原』アボック社、275p.
- 牧英雄（1995）：B-24技術的解剖と開発、各型. 『B-24リベレーター』世界の傑作機No.54、pp10-27.
- Morison, S. E. (1953) : *History of United States naval operations in World War II, New Guinea and the Marianas*. University of Illinois Press, 435p.
- Morison, S. E. (1960) : *History of United States naval operations in World War II, Victory in the Pacific*. University of Illinois Press, 407p.
- 中川務（2001）：第2部 軽巡洋艦. 『第2次大戦のアメリカ巡洋艦』世界の艦船No.578、pp75-131.
- 中道末吉（1983）：『父島日誌』私家版、42p.（小笠原村教育委員会所蔵）
- 中村文武（1989）：『我が青春 第5震洋特別攻撃隊』私家版、130p.（小笠原村教育委員会所蔵）
- 中山善弘・林眞司（1999）：公開講座「父島野外巡検」まとめ. 東京都立小笠原高等学校

研究紀要、Vol.13, p.55-131.

根本正良（1989-1990）：硫黄島夜間爆撃行・第一部・第二部. 中攻の会機関誌遠き島かげ.
以下のホームページに転載

(http://www.aramant.com/chuukou/page04_04.html)

日本海軍（発行年不明）：『小笠原父島埋立工事平面図（縮尺壺千分之壺）』日本海軍.
（小笠原村教育委員会蔵）

日本海軍（1945）：『昭和20年硫黄島方面電信綴』日本海軍、p.0383-0425.（防衛研究所蔵）

日本海軍父島方面特別根拠地隊司令部（1944a）：『戦時日誌・戦闘詳細』.（防衛研究所蔵）

日本海軍父島方面特別根拠地隊司令部（1944b）：『父島方面特別根拠地隊戦闘詳報 第四號』、81p.（防衛研究所蔵）

小笠原村（1973）：なつかしき日々・返還五周年を迎えて.『村民だより縮刷版第1号～第52号』、小笠原村、巻頭.

小笠原村教育委員会（2002）：『小笠原村戦跡調査報告書』小笠原教育委員会、p.44.

押尾一彦（2005）：『特別攻撃隊の記録・海軍編』光人社、247p.

佐山二郎（2008）：『大砲入門』光人社NF文庫、431p.

Stafford, E. P. (1962) :『The Big E: The Story of the Uss Enterprise 』、Random House, 500p.（日本語訳 井原祐司訳（2007）：『空母エンタープライズ』、元就出版社）

Stinnett, R. B. (1992) : *George Bush : His World War II Years*. Brassey's (US), Inc, 208p.

田畑道夫（1993）：『小笠原ゆかりの人々』小笠原教育委員会、378p.

多田実（1980）：『海軍学徒兵、硫黄島に死す』講談社、299p.

滝沢幸夫（1987）：滝沢幸夫さんの話.『戦争体験記』東京都小笠原村立母島小中学校PTA、pp.21-23.

The Office of Air Force History (1973) *U.S. Army Air Forces in World War II Combat Chronology 1941 - 1945*. the Office of Air Force History.

徳井一男（1987）：徳井一男さんの話.『戦争体験記』東京都小笠原村立母島小中学校PTA、pp.57-60.

竹井慶有（1992）：『南の空に下駄はいて-海軍水上機隊空戦記』光人社、288p.

梅野和夫（2007）：『世界の艦載兵器一砲煩兵器篇』光人社、275p.

海野進（2007）：『父島の地質フィールドガイド』平成19年度東京都小笠原自然ガイド能力向上講習資料、12p.

海野進・中野俊（2007）：『父島列島地域の地質』独立行政法人産業技術研究センター地質調査総合センター、71p.

渡辺洋二（1992）：夜のヘルキャット. 『大空の攻防戦』朝日ソノラマ、pp.177-250.

山田尚義（1987）：『さまよう生と死、暗黒のはざま 主計下士官父島日誌』丘書房.

山下茂幸（1995）：硫黄島. なにわ会ニュース、p17. 以下のHPに転載

(<http://www5f.biglobe.ne.jp/~ma480/senki-1-ioujima-yamasita1.html>)

United States Fleet Headquarters of Commander in Chief（1944）：*Battle Experience Night action and subsequent bombardment of Chichi jima and Ani jima, Bonin islands 4-5 August 1944.* Navy Department.

夜明会（1983）：『小笠原高射砲隊対空戦闘実記』私家版、24p.（東京都立小笠原高等学校所蔵）

米原実（1969）：十九年六月－八月の捕虜. 『小笠原兵団の最後』原書房、pp211-213.

吉岡健児（1985）：『僕の軍隊時代』私家版.（小笠原村教育委員会所蔵）